

干潟の名称	猿払原野湖沼群（ポロ沼）
干潟の所在地	北海道宗谷郡猿払村猿払
干潟の面積	～1000m ²
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	砂、泥、礫
干潟植生	ヨシ、コアマモ
干潟の特徴	ポロ沼は猿払原野に点在する湖沼群の中では最大の汽水湖である。水深は極めて浅く、大部分は1m以浅にとどまっており、湖内にはコアマモが密生している。猿払川を通してオホーツク海と連絡している。湖岸は広大なヨシ原に覆われており、良好な自然湖岸域を形成している。干潮時には河口付近に数十 m 幅の干潟が出現するものの、湖岸全体の干潟の規模はそう大きくはない。
生物相の特徴	ベントス相はやや豊富である。テシオカワザンショウは湖岸域に多産する。次いで、スナガニ科のアリアケモドキ、 <i>Heteromastus</i> 属の1種、ヤマトカワゴカイも多く見られる。湖内ではヤマトシジミ漁業が行われていたが、オホーツク海に注ぐ水路を短絡化した結果、塩分濃度が高まり、ヤマトシジミの再生産がうまくいかなかった。そのため、若齢ヤマトシジミが見あらず、老齢貝のみとなっている。
調査者氏名	五嶋聖治、千葉 晋、四宮雄一
調査年月日	2002年6月13日

干潟の名称	クッチャロ湖
干潟の所在地	北海道枝幸郡浜頓別町
干潟の面積	～100m ²
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	砂、泥
干潟植生	ヨシ、カサスゲ
干潟の特徴	クッチャロ湖は南の大沼、北の小沼からなる浅い汽水湖で、オホーツク海とはクッチャロ川を通して連絡している。コハクチョウの飛来地としても有名で、ラムサール条約登録湿地に指定されている。湖岸東側には護岸されている地域があるが、その他の大部分は自然湖岸のままである。湖岸域の干潟形成の規模は小さく、湖岸の湿地域にはやや広大なヨシ原が形成されている。河口付近（A）はごく狭い干潟のみが干出し、後背地は数十 cm の段差をなして高まるためほとんど冠水せず、ヨシ原となっている。B 地点もほとんど干出干潟はなく、ヨシ原がひろがりその中に分解されにくい植物質が堆積している。最奥部の C 地点は安別川河口付近に位置し、非出域はほとんどない。ヨシ原内にカサスゲが混在する植生域を形成している。
生物相の特徴	干出干潟の規模が小さいためか、採集されたベントス相はやや貧弱である。ハマトビムシ（ <i>Platorchestia</i> 属の 1 種）、トゲオヨコエビ、 <i>Heteromastus</i> 属の 1 種、スジエビが目立つ種類である。湖内ではワカサギ、スジエビ、ヤマトシジミ漁業が行われている。
調査者氏名	五嶋聖治、千葉 晋、四宮雄一
調査年月日	2002 年 6 月 12 日

干潟の名称	天塩川(河口域)
干潟の所在地	北海道天塩郡天塩町
干潟の面積	～100m ²
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	砂、砂泥、泥、礫
干潟植生	主にヨシ
干潟の特徴	天塩川河口域に形成される河口干潟である。天塩川は河口域において右岸に幅の狭い砂質の砂嘴を形成しており、約5kmほど海岸沿いに流れて日本海に注ぐ。この右岸はほとんど護岸されておらず、自然海岸が残されている。左岸は天塩町の市街地に面しており、ほとんど護岸されている。干満差の少ない日本海側に面しているため、出現する干潟の規模は大潮干潮時でも小さく、河岸沿いに幅数メートル程度に出現するのみである。底質は河口に近い地域(A)は主に砂質、河口から3kmほどの地点(B)は泥、砂、礫が混在し、河口から5kmほどの地点(C)は粘土質に小石が混じったやや硬い底質になる。河岸沿いにヨシ原が狭く形成されている。
生物相の特徴	河口域(A)は波浪の影響を受けやすく、底質も砂質であるためハマトビムシ(<i>Platorchestia</i> 属の1種)以外のベントスは見あたらなかった。さかのぼるほどにヤマトシジミ、イトメが出現し、最上流のC地点ではスナガニ科のアリアケモドキが出現した。全体的にはベントス相は貧弱である。これは干潟の規模が小さいことも一因と考えられる。ただし、天塩川河口付近一帯はヤマトシジミの好漁場であることが知られている。
調査者氏名	五嶋聖治、千葉 晋、四宮雄一
調査年月日	2002年5月21日

干潟の名称	サロベツ原野湖沼群（パンケ沼）
干潟の所在地	北海道天塩郡幌延町
干潟の面積	～100m ²
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	粘土、PEAT
干潟植生	ササ
干潟の特徴	パンケ沼は天塩川・サロベツ川と水路で連絡しており、塩分の薄い汽水湖である。パンケ沼とその周囲は国定公園に指定されており、沼内でヤマトシジミ漁業が行われている程度で、高い自然度を保っている。干満差が少ないため干出する干潟の規模はごく小さく、湖岸域に数メートル幅で露出する程度である。湖岸域の底質は粘土、PEATからなり、その上には分解の進まない植物質が堆積している。干出干潟のすぐ背後は1mほどの段差を形成して高くなっているために冠水することはなく、乾燥化が進み主にササ原となっている。
生物相の特徴	塩分濃度が低くほとんど淡水に近いため、ベントスとしてはユスリカ幼虫が優占している。次いでトゲオヨコエビが目立つ。かつてはヤマトシジミの好漁場であったが現在は資源量がかなり減少しているという。
調査者氏名	五嶋聖治、千葉 晋、四宮雄一
調査年月日	2002年5月21日

干潟の名称	野付湾・尾岱沼
干潟の所在地	北海道野付郡別海町
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	砂洲干潟
干潟の底質	砂礫質
干潟植生	キタヨシ、ハマニンニク、シバナ、ウミミドリ、ハマシオン、アッケシソウなど
干潟の特徴	<p>砂嘴で作られた野付半島に囲まれた浅海に広がる干潟で、先端の野付崎周辺にもっとも広大な干潟を形成する(A)が、野付崎付近は漁業者などを除く一般の人の侵入を原則的に禁止している原生的自然が十分残されたところである。底質は一般に砂礫質で、一部で泥質のところもある。生物相は比較的豊富である。野付半島の間中部にあるトドワラ周辺にも干潟が広がる(B)。トド原には多くの観光客が立ち入るが、木道が完全に敷設され干潟に入る人はほとんどいないため、干潟は十分保全されている。底質は干潟上部は湿原の堆積物(泥炭)質であり、干潟上部の植生帯と似ているが、中部以下は砂質であった。しかし、生物は貧弱。とくに泥炭層では生物は表面のみに限られている。野付半島基部の道道沿いに広がる干潟は面積としては野付干潟のうちでは少ない。上部植生帯から渚線までの距離はせいぜい100mくらいまで。底質は軟泥で、下部は歩行が困難になる。全体として野付干潟の後背地には植生帯が自然に近い姿で広がり、道路や人工構造物による破壊が比較的少なく、よく保存されている。</p>
生物相の特徴	<p>野付半島の先端、野付湾の入り口付近の干潟では、生物の多様性がこの付近としては高い。とくに、巻貝類(腹足類)の多様性が高いのが、特徴である。ホソウミニナが多くの場所で優占している。寒冷的な塩性湿地であるので、干潟上部は植物の根が腐敗しないでそのまま保存され、埋在性の動物があまりすめない。</p> <p>A, B, Cそれぞれの干潟の後背地の植生は、いわゆる塩性湿地(salt marsh)の様相を持ち、アッケシソウ、ウミミドリ、シバナなどが優占しており、その背後にさらにキタヨシによるヨシ原がある。カワザンショウ類の新種と思われるものがC地点で発見された。また、ウミカニムシが発見された。</p>
調査者氏名	向井 宏、三村節子、五味寛子、五味尚紀、五味あゆみ
調査年月日	B、C 2002年5月28日 ; A 5月29日

干潟の名称	厚岸湖
干潟の所在地	北海道厚岸郡厚岸町
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	Aは河口干潟、BもCも小河川の河口沖にできた干潟
干潟の底質	泥質
干潟植生	Aにはなし。B、Cにはコアマモ
干潟の特徴	厚岸湖岸に帯状に広がる干潟で、厚岸湖に流れ込む別寒辺牛川（A）、トキタイ川（B）、東梅川（C）の河口付近に干潟の堆積が広がっている。泥質で歩行が困難なほどである。厚岸湖の湖口付近の中央にも干潟が広がっており、かつてはカキ礁として知られたが、これらはすべて漁業者が山砂を入れてアサリの養殖を行っているので、自然の植生や動物相はほとんど失われており、今回の調査の対照とはしなかった。湖の奥側半分くらいの湖岸沿いの干潟は、アクセス道路がなく、一部のカキ養殖業者以外は立ち入ることも少なく、自然度は高い。今回調査したA地点付近は、冬季にオオハクチョウやカモ類などの水鳥が多数見られる。一方、B、C地点付近では、夏季はヒグマが出現し、タンチョウの営巣地となる。奥部の干潟は冬季に数十cmの厚さで氷結するので、生物相は比較的貧弱であるが、日本の他の地域とはことなり、寒流の影響のある独特の動物相を持つ。干潟の潮上帯にはキタヨシ群落が発達し、一部にアッケシソウも群落を作る
生物相の特徴	新種であるアッケシカワザンショウとホソウミニナが多産する。ただし、種の多様性はかなり低い。その大きい理由は、野付半島と同じように、厚岸湖でも塩性湿地の地下部（地下茎と根）が枯れたまま腐敗しないため、埋在性の動物が <i>Heteromastus</i> 属の1種のような一部のイトゴカイ類を除き、ほとんど住めないためであろう。河口付近を除いてほとんどの干潟はコアマモが生育している。今回調査した場所では、アナジャコはわずかに確認できたのだが、厚岸湖の他の干潟（浅場）では、アナジャコが高密度に存在している場所が知られている。
調査者氏名	向井 宏、五味寛子、三村節子、山下京子、濱野章一、桂川英徳
調査年月日	A 2002年5月14日、B 5月15日、C 5月16日

干潟の名称	厚岸湾
干潟の所在地	北海道厚岸郡厚岸町港町
干潟の面積	2.3ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	砂質干潟
干潟植生	アマモ
干潟の特徴	厚岸湾には干潟はあまり多くないが、その大部分が埋め立てによって失われている。わずかに残った2ha程度の干潟が唯一の干潟である。干潟の上部にはわずかに残った海岸植生が生育しているが、その中に多くの陸上植物が侵入している。さらにその上部は垂直護岸となっており、この干潟も埋め立て計画があったが、沖合いにオオアマモの群落があることを訴えて、埋め立て計画は中止になった。干潟の底質は砂質。下部にはアマモの群落が点在している。イソタマシキゴカイがたくさん生息しており、糞塊が表面に多数見られる。ときおり、地元の人が釣り餌のゴカイ類を採集に来ている以外、ほとんど地元の人による利用は見られない。
生物相の特徴	残されたわずかな干潟であり、アマモ、オオアマモが低部に見られる。後背地も埋め立てでほとんど残っていない。アサリ、ウバガイが多少見られる程度で、多様性も低い。しかし、イソタマシキゴカイ個体群が高密度で存在する。アナジャコもわずかに見られる。
調査者氏名	向井 宏、堀 正和、五味寛子
調査年月日	2002年7月27日

干潟の名称	コムケ湖
干潟の所在地	北海道紋別市
干潟の面積	1000m ² 〜
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	粗砂、細砂、砂泥
干潟植生	ヨシ、一部にシバナが混生
干潟の特徴	コムケ湖は、オホーツク海とは狭い砂州によって仕切られた海跡湖であり、東端でオホーツク海と連結している。湖岸域の大部分はヨシ原に覆われた自然湖岸のままである。細い人工湖口を通じて干満とともに外海水が出入りするため、湖口付近（地点A）は塩分濃度が高いが、奥に行くにしたがって塩分濃度は低下する。干潮時には幅 100m 以上の砂泥底干潟が出現する。全般に良好な干潟が保存されている。湖内ではマガキの養殖が行われている。
生物相の特徴	湖口に近い地点Aでは塩分濃度の高いことを反映して、マヒトデ、クロガネイソギンチャク、チヂミボラ、ヒメエゾボラ、サラガイ、ウバガイ、バカガイなどといった海産ベントスが普通に見られる。中間地点であるBでは、表面にはホソウミニナが多産し、砂泥中にはオオノガイ、ソトオリガイ、アサリ、イソシジミ、ヒメシラトリなどの汽水性の二枚貝類が多く分布する。奥部である地点Cでは、干潟表面にホソウミニナが多く見られ、わずかではあるがホトトギスも生息する。堆積物中にはベントスは少ないものの、ソトオリガイ、ヒメシラトリ、ユスリカ幼虫が見られ、塩分勾配を反映した分布を示している。地点A、Bの干潟下端部では大型のユムシが採集された。それほど大面積の海跡湖ではないが、その割には豊富なベントス相が保持されている。
調査者氏名	五嶋聖治、橋爪繁幸、鹿内慎也
調査年月日	2003年5月19日

干潟の名称	シブノツナイ湖
干潟の所在地	北海道紋別市、紋別郡湧別町
干潟の面積	～100m ²
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	砂泥
干潟植生	湖岸にはヨシ原が形成されている。一部にエゾツルキンバイも混成している。
干潟の特徴	シブノツナイ湖は狭い砂州によって仕切られた海跡湖である。湖口はオホーツク海の海面より人工的に高く仕切られているため、海水の流入はほとんどなくなっている。そのため、湖水の塩分濃度は低く、干満の影響はほとんど受けないため、干出する干潟もほとんどない。湖岸域はほとんどがヨシ原に囲まれた自然湖岸を保持している。
生物相の特徴	塩分濃度が低く、干潟面積も狭いので、湖岸域のベントス相は貧弱である。ヤマトシジミ、トゲオヨコエビ、シナコツブムシ、ユスリカ幼虫などが見られる程度である。なお、湖内では少ない漁獲量ではあるがヤマトシジミ漁業が行われている。
調査者氏名	五嶋聖治、橋爪繁幸、鹿内慎也
調査年月日	2003年5月20日

干潟の名称	根室湾
干潟の所在地	北海道根室市
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	砂質、一部礫が混じる
干潟植生	アマモ・コアマモ。植生帯にはコウボウムギ。
干潟の特徴	黒色砂質の起伏の少ない平坦な前浜干潟が広く広がる。外洋に開けた根室湾にあり、波浪が直接当たるため、リップルマークが顕著に現れる。ほとんど還元層はみられない。後背地は国道まで100m以上の距離があり、人家も少ないため自然の海岸植生が残る。とくに、Aラインは春国岱の砂州が後ろにあり、ほとんど人も近づかない。干潟ではホッキ貝（ウバガイ）の漁業が行われている。
生物相の特徴	干潟上にはアマモが所々見られるが、波あたりが強いので草丈は短い。ウバガイ、アサリなどが多いが、種数は比較的少ない。生息場所の多様性は少ないが、二枚貝の種数は多い。多毛類のものと思われる2種類の卵塊が多数干潟上に見られた。ナナテイスオメ科の1種 (<i>Kinbergonuphis</i> sp.) の棲管が見られる。道東周辺の干潟にきわめて普通のホソウミニナがまったく見られないのが特徴的である。
調査者氏名	向井 宏・中出信男・五味尚紀・五味あゆみ・五味寛子
調査年月日	2003年5月16～17日

干潟の名称	火散布・藻散布
干潟の所在地	厚岸郡浜中町
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	軟泥質干潟
干潟植生	ハマニンニク、シオクグを主体とする貧弱な植生帯
干潟の特徴	底質がきわめて細かく、軟泥。海岸から藻散布沼中央へ干潟が広がっているにもかかわらず、軟泥のためアプローチができず、A1の一地点のみの調査となった。
生物相の特徴	アサリ・オオノガイなどの二枚貝やカワゴカイ類が生息。ホソウミニナ・ウズザクラが豊富。アナジャコも生息する。タンチョウが近くで営巣し、この干潟で摂餌する。
調査者氏名	向井 宏・五味寛子
調査年月日	2004年6月3日

干潟の名称	琵琶瀬湾
干潟の所在地	厚岸郡浜中町
干潟の面積	1～2ha
干潟の地形タイプ	河口域干潟（A）および前浜干潟（B，C）
干潟の底質	Aは砂泥質で下はPEAT状。Bは砂質。Cは泥質。
干潟植生	Aの周囲は人工壁で後背地はなし。B，Cには植生がわずかに残る。
干潟の特徴	琵琶瀬湾には残された干潟が非常に少なく、今回調査を行った3カ所がほとんどすべてである。そのほかに、霧多布大橋の左岸にかなり広い干潟があったが、今年度の初めに大規模なアサリ養殖場建設のために重機で干潟を掘り返してしまったため、本来の干潟が失われてしまった。調査した3カ所は、それぞれまったく異なった環境の干潟であり、河口干潟（A）、砂質の前浜干潟（B）、泥質の前浜干潟（C）であるが、どれも周りをコンクリートの垂直護岸で囲まれ、自然海岸はほとんど残っていない。干潟も人為的な影響で自然の様相から変化していると思われる。河口干潟は富栄養化が激しく、還元泥が表層に堆積している。保全すべき干潟としての重要湿地の価値は失われたと言えるだろう。
生物相の特徴	生物相は貧弱。A、C地点付近に昔の干潟の残滓が残っている。キタユムシが採集されたが、これもおそらくそう遠くない日にいなくなるだろう。植生帯もきわめて貧弱。めぼしい生物もほとんど見られない。
調査者氏名	向井 宏、田中義幸、五味寛子
調査年月日	2003年8月12日

干潟の名称	サロマ湖
干潟の所在地	北海道紋別郡湧別町、常呂郡佐呂間町、常呂町
干潟の面積	1000m ² ～
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	砂、砂泥、泥、礫
干潟植生	湖岸域は広くヨシ原に覆われている。干潟中下部には場所によってコアマモが、そしてそのすぐ下の潮下帯にはアマモが濃密に分布する。
干潟の特徴	サロマ湖は面積約 150km ² の日本第3位の大きさの湖である。オホーツク海とは細く長い砂州によって仕切られている海跡湖である。現在は2カ所の湖口によって外海との海水交流が行われており、湖内の塩分は高い。湖内ではホタテガイの垂下養殖や、ホッカイエビ、魚類を対象とした漁業が盛んに行われている。干潮時には、湖岸域に幅数百m、時には1kmにもおよぶ広大な砂泥質干潟が干出する。干潟中下部にはコアマモが繁茂する地域もある。干潟のすぐ下から水深5mほどまでは広大なアマモ場が形成されている。湖岸には枯死流失したアマモの堆積物が厚く積もっている箇所も多く見られる。湖岸域は主にヨシ原によって覆われており、その外側には原生花園や自然林が形成され、自然湖岸を多く残している。
生物相の特徴	湖口近くの地点Aは外海水の影響を強く受ける地点で、干出する干潟は狭いものの、表層にはエゾタマキビ、エゾザンショウ、クロスジムシロなどの巻貝が多く見られる。堆積物中にはアサリが多い。地点Bにはコアマモが生息し、表層にはホソウミニナとエゾタマキビが多産する。砂泥中にはオオノガイとキタノオオノガイが混在する。地点Cでは干潮時に広大な干潟が干出する。ここでも干潟上にコアマモが分布し、表層にはホソウミニナ、エゾタマキビといった巻貝が多産し、砂泥底中にはイソシジミ、オオノガイ、キタノオオノガイなどの二枚貝が多く見られる。サロマ湖では、近縁種であるオオノガイとキタノオオノガイが同一地点に混生している。付近の似たような海跡湖であるコムケ湖、能取湖では、キタノオオノガイの生息は確認されていない。サロマ湖は全般的に豊富なベントス相が保持されている。
調査者氏名	五嶋聖治、佐藤琢、辻宏幸、橋爪繁幸
調査年月日	2003年6月14日

干潟の名称	能取湖
干潟の所在地	北海道網走市
干潟の面積	1000m ² 〜
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	砂、砂泥、泥
干潟植生	湖岸域は主にヨシ原で、ウミミドリ、シバナなどが混生しているところもある。アッケシソウ群落も点在する。
干潟の特徴	能取湖はオホーツク海に隣接する海跡湖であり、細い湖口を通して外海と連絡している。干潮時には広大な干潟が出現する。湖口に近い干潟は砂分が多いが、奥部になるにつれ砂泥質から泥分が多くなり、最奥部の地点Cでは歩くのがやや困難なほど軟泥が多くなる。干潟上には場所によってはコアマモが繁茂し、干潟域のすぐ下部にはアマモが濃密に生息するアマモ場を形成し、ホッカイエビや魚類などの重要な生息場となっている。湖内ではホタテガイの種苗生産や、ホッカイエビ、カレイ類などを対象とした漁業が盛んに行われている。湖岸には流失したアマモの堆積物が厚く積もっている箇所も多く見られる。湖岸域は主にヨシ原によって覆われており、アッケシソウの群落が見られる箇所もある。全般的に自然湖岸を多く残している。
生物相の特徴	地点Aは湖口に近く、砂質の干潟が干出する。表面にはホソウミニナ、クロスジムシロ、エゾタマキビなどの巻貝類が多産する。砂質中にはイソシジミ、アサリが多い。地点Bには砂泥質の広大な干潟が出現する。干潟中下部にはコアマモが繁茂し、表面にはホソウミニナが多産する。砂泥底中にはサビシラトリ、ソトオリガイ、オオノガイなどの二枚貝が多い。干潟中部にはアナジャコとハルマンズナモグリが多く見られる。地点Bの植生域では、打ち上げられたアマモの中や下には、微小な巻貝であるヤマボタルガイ科の北方系種であるヤマボタルガイが多産する。最奥部に位置する地点Cは軟泥質の干潟である。泥表面にはホソウミニナ、エゾタマキビ、コツブムシ (<i>Gnorimosphaeroma</i> 属の1種) が多く分布する。堆積物中にはミズヒキゴカイやタマシキゴカイなどの多様な多毛類が分布する点が他の地点とは異なる。能取湖もサロマ湖同様に、比較的ベントス相が豊富な干潟を有する。
調査者氏名	五嶋聖治、佐藤琢、橋爪繁幸
調査年月日	2003年6月15日

干潟の名称	網走湖
干潟の所在地	北海道網走市、女満別町
干潟の面積	～1000m ²
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	ヨシ
干潟植生	湖岸域は主にヨシ原で、ウミミドリ、シバナなどが混生しているところもある。アッケシソウ群落も点在する。
干潟の特徴	網走湖は、面積は 32.5 km ² 、最大水深 16.4 m、平均水深 6.1 m の汽水湖である。栄養塩濃度が高く、富栄養湖とされている。網走川を通してオホーツク海と連絡しているが、網走川の川床は高く、かつ細いので海水交流量は大きくはない。そのため、塩分濃度は低く、潮汐による干満差も小さく、干出する干潟の規模は小さい。湖岸域はヨシ原や、ハンノキ、ヤチダモなどの湖岸林に覆われているが、一部に人工護岸の箇所も見られる。湖内ではヤマトシジミ漁やワカサギ漁が行われている。
生物相の特徴	湖内3つの調査地点は、いずれも干出面積が小さいので、採集ベントス数も多くはない。湖口に近い A 地点ではヤマトシジミ、ヨコエビ類、オカモノアラガイが採集された。女満別川河口付近の地点 B では、ヨコエビ類、イソコツブムシ、貧毛類が採集され、最奥部の C 地点ではヨコエビ類、オカモノアラガイが採集された程度である。いずれも塩分濃度が低い環境に出現する種であり、網走湖の低塩分濃度を反映した種群である。
調査者氏名	五嶋聖治、橋爪繁幸、遊佐貴志
調査年月日	2004年5月18日

干潟の名称	風蓮湖干潟
干潟の所在地	北海道別海町
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	海潟湖に面した干潟
干潟の底質	砂泥もしくは泥質。
干潟植生	アマモ・コアマモ・アオノリ類。後背地にキタヨシ・シバナの群落。
干潟の特徴	海潟湖の内側に成立する干潟である。湿原から流れ出す水の影響を受けているところでは、非常に細かい泥質の干潟があり、またBラインの沖合地点では、外浜の前浜干潟に似たような淘汰の良い砂質干潟となるなど、多様な干潟が存在している。風蓮湖が浅い海潟湖であるため、干潟も傾斜がほとんど無い平坦な地形である。砂州上の後背地には海浜植物が生育する植生帯が湿原に続いている。
生物相の特徴	砂質のBライン沖側を除いて、ほとんどの干潟でホソウミニナを多数産する。また、Cラインには、コアマモが海底面を覆い尽くすほど見られた。種の多様性は比較的高く、多毛類、二枚貝類の種類が多い。イソタマシキゴカイが優占する。キタユムシやイカリナマコ類が見られたのが特徴的である。
調査者氏名	向井 宏・五味寛子・田中義幸
調査年月日	2003年6月3～4日

干潟の名称	濤沸湖
干潟の所在地	北海道網走市、小清水町
干潟の面積	～1000m ²
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	泥、砂泥、砂、礫
干潟植生	ヨシ
干潟の特徴	濤沸湖は面積 9.0 km ² 、最大水深 2.5 m の浅い汽水湖である。北方は細長い砂州によってオホーツク海と仕切られている海跡湖である。外海とは北西端の水路によって連絡している。干満差は大きくはなく、干出する干潟の規模は小さい。湖内の水質は腐植型の富栄養湖とされ、カキ養殖が行われている。湖岸は湖口付近を除いては、軟泥域が多い湿地帯となり、大部分はヨシ原に覆われた自然湖岸のままである。一部は放牧地となっている。北岸は道路を隔てて、小清水原生花園に接し、センダイハギ、ヒオウギアヤメなどが見られる。
生物相の特徴	湖口に近い A 地点では、底質中にはイソシジミが高密度に見られ、表層にはホソウミニナ、キタナミノリソコエビ、マルコツブムシが生息している。湖中央部の B 地点は軟泥域で干出干潟もごく狭い。生物相は貧弱で、わずかにヨコエビ類とシナコツブムシが見られた程度である。最奥部の C 地点も干出面積は小さく、スジエビ、マルコツブムシ、ヨコエビ類が見られた程度である。A 地点を除いては干潟の規模は小さく、生息するベントスも湖岸域には少ない。
調査者氏名	五嶋聖治、橋爪繁幸、遊佐貴志
調査年月日	2004年5月19日

干潟の名称	温根沼
干潟の所在地	根室市温根沼
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	軟泥質干潟（砂質部を一部含む）。後背地はPEAT。
干潟植生	沖合のアマモ場と隣接。コアマモ群落。後背地には、ハマニンニク、シバナ、ハマリソウ、ウミミドリ、ハマオグルマ、ツルキンバイなど。
干潟の特徴	潟湖オンネトーのほぼ北東半分が干潟で、沖側に広大なアマモ場が続く。干潟部にはコアマモ群落が多い。後背地はPEATの湿地帯。アマモ場に続く沖側干潟は軟泥であるが、コアマモ群落の多くは淘汰度の低い砂質干潟である。一部でアサリ稚貝の生育場として使用されているが、人間による攪乱は比較的少ない。
生物相の特徴	キタユムシ・アナジャコ・キタイソメが豊富に見られる。多様性は、軟体動物、甲殻類、多毛類、その他の動物群それぞれにとっても、比較的高い。アマモ場に隣接し、コアマモ群落が存在するため、干潟にも海草に依存した動物も多い。
調査者氏名	向井宏・渡辺雅子・五味寛子
調査年月日	2004年6月21日（A・B地点） 2004年7月5日（C地点）